

平成 29 年 9 月 14 日

平成 29 年度安曇野検定準備講座
郷土を愛した漆芸術家 高橋節郎

安曇野市教育委員会
教育部文化課文化振興係
三澤新弥

- 1 はじめに
- 2 誕生～学生時代
- 3 近代の工芸について アール・ヌーヴォー、アール・デコと日本の工芸
- 4 近代の美術について シュルレアリスムと日本の美術
- 5 戦時下の芸術家
- 6 高橋節郎の軌跡
- 7 戦後の美術について
- 8 高橋節郎と近代美術
- 9 高橋節郎の技法について

高橋 節郎（たかはし・せつろう） 1914-2007年（大正3～平成19年）

1914（大正3）年9月14日 南安曇郡北穂高村に生れる。

1940（昭和15）年 東京美術学校研究科を修了し、紀元二六〇〇年奉祝美術展に入選。以後、文展・日展に入選・受賞を続ける。

1961（昭和36）年 現代工芸美術家協会の結成に参加。工芸美術分野の指導者の一人として、新しい美術の地平を開拓。

1965（昭和40）年 日本芸術院賞を受賞する。

1976（昭和51）年 東京藝術大学美術学部教授に就任し、後進の指導に当る。

1978（昭和53）年 現代工芸美術家協会理事長に就任する。

1982（昭和57）年 東京藝術大学美術学部教授退官。日展常務理事に就任する。穂高町名誉町民（現安曇野市名誉市民）となる。

1990（平成2）年 文化功労賞を受ける。

1995（平成7）年 東京藝術大学名誉教授となる。豊田市美術館高橋節郎館が開館する。

1997（平成9）年 文化勲章を受章する。

2003（平成15）年 北穂高の生家の地に、安曇野高橋節郎記念美術館が開館する。

2007年（平成19）4月19日 逝去（享年92）。

「无型の誕生」 高村豊周

无型は無型、型ナンだ。型をもたぬ。すべて自由に、各人各様の姿態を持つ。それならば何でもよいかといふに、必ずしもそうではない。各人各様の姿態を通じて目に見えぬ線の連鎖があるのでなければならぬ。燃え上がる情熱と生一本のムキな意気込みと牛のような根気と、そして美しい未来へのあこがれと、-これだけは是非ともなくてはかなわぬ。懐古趣味、退嬰、萎縮、安息、死滅、空虚、沈黙、現状維持、事勿れ、-これは无型の最も排斥するところだ。新鮮、グキグキッド、潑刺、前進、躍動、充実、現状破壊、未来、歓声、-すべて光ある彼方へ向かって无型は旗を振りかざす。今は即ち今だ。飛び去る瞬間だ。この瞬間を愛せよ。この瞬間に息づく工芸美術を作れ、守れ。大宮人が桜をかざして歩いた時代を憧憬する者よ、まづ死ね。

「山河あり」 石井柏亭 1947

関四郎五郎と康男を伴ひ私は四月二十六日朝の大糸南線で有明へ行つた。北穂高の村長をして居る高橋太一のことを、私は此間汽車で偶然其息子の達郎に会ったことから思ひ出した。太一はもと銀行勤めの身であつたが、好きで画いた水画を東京に持参して私に批評を乞うたことがある。それはたしか結城素明の紹介であつたと記憶する。達郎も一時二科技塾に画を学んだことがあるが、今は其兄の経営する軍需工場の技師長になって居る。(略)

池上秀敏未亡人や資生堂福原信三の弟などの居る豊科の次が穂高、其先が有明である。関もここを訪ねるのは初めてであり、途中一二箇所を訊いて容易に其邸は知れた。それは平坦な安曇野の高瀬川に近い所に信州特有の、刈り込まれた丈の高い庭樹に囲まれた極めて清潔な豪家の構へであつた。

久々で会ふ村長は大分ふけもしたし、リウマチスとか神経痛とか云ふ其足に多少不自由さを見せて居る。室には額に入れた自身の水画や、又下の息子の作と云ふ漆画の衝立などが置いてある。(略)高瀬川の堤へ出て見たが、画にはなりにくいので引返し、逆光に其青い輪郭をくつきりとさせて居る有明山を主として、其前に農家の部落を配した一図を作つた。(略)太一は始終そばに居て私の画をかく順序を見守って居た。(略)高橋の家には一人陸軍の将校が泊まつて居る。それはここの国民学校に衛生部隊が来て居り、其部隊長であると云ふ。

其晩明科に電話して、私のここに居ること、明朝訪ねる予定であることを、其米屋に泊まつて居る中村善策に告げた。然るに翌朝私が主人に頼まれて紙本の横物を一枚画き終わった頃善策は逆に訪ねて来た。

書簡

1932（昭和7）10月3日 結城素明から太一宛の書簡

図按科入学試験の方針はいまだ確定いたさず候。よって（図按は写生草花のみにて試験を施行することになることになるかもわからずとの事なり）何れかにて写生のみを勉強しかるべしと存じ候。

1933（昭和8）年2月21日 太一から節郎宛のハガキ

出願期日よいよ差し迫り、諸準備忙しきことと存候。明日先生へお訪ね志願科目を決められたく候。万一不在なれば、明後日再度お訪ね相成りたく候。色々腹蔵無くお聞きしてみること必要に存候。当方よりも先生へ手紙にてお願いいたしおき候。

1933（昭和8）年3月28日 節郎から祖母まち宛の書簡

早くに試験の様子お知らせしようと思いましたがあまり気が進みませんでしたので。試験は無事すみましたがまだ発表にはなりません。発表は明日です。志願者が多いもんですから難しく。いずれ発表すんでからでなければわかりません。

1933（昭和8）年3月30日 妹から節郎宛の書簡

兄さんの試験の時から、私たちはもう毎日試験はもう済むか、よく出来たか、とって心配しておりました。いよいよ29日に発表されるといふ事をお父様にお聞きしましたので、今日まで心配しながら待っていたのです。けれどもそこに私は一つ「兄さんはきつと入る」といふ事を思っておりましたが、お母様があまりに心配するので、時には、兄さんは入るか落ちるかとかあやふやに思ふこともありました。

10時、11時、11時半になりましたが、やはり電報はまいりません。すると、その時、玄関でカタリと音がして、人の入ってくる気配がします。そら電報だといって飛び出していってみると、大きな風呂敷を背負った商人だったりしました。そういうことが2、3回ありました。

12時は過ぎて、1時も過ぎましたが、何の音沙汰もございません。お母様はもう肩がこってしまったとって、寝てしまひました。そしてもうあきらめるものなら、あきらめやうと言っていました所へ電報とって来ました。さあ大喜びです。うれしいうれしいで大騒ぎでした。

1934（昭和9）年9月13日 節郎から太一宛書簡

新聞の報ずる所もよれば銀行に白昼強盗におそわれた由あまりの事にぼう然としました。父上にはさぞ心配なされたことと存じます。しかしお金はとられなかったとの由不幸中の幸いと申しませう。

1935（昭和10）年6月24日 節郎から太一宛書簡

学校と帝国美術院の問題も一段落つきやと落ち着いた様な訳です。先生は多忙の様子一向に会いません。

話によれば、帝展問題で最初に大観の策動で先生を全然会員に入れてなかったのが、先生もだいぶ憤がいなされた様な話でした。

今月は旅行や材料代で10円程不足しましたから勝手ながらご送金お願いします。

1935（昭和10）年9月20日 節郎から妹太己・ふみ宛の絵ハガキ（宮本三郎作品）

昨日二科を見てきた。このハガキはその1点です。しっかり勉強してくれ、お母様のお手伝いもして。

1937（昭和12）年5月3日 節郎から太一宛書簡

結城素明出品の日本画会を見ました。絵葉書がありました故お送りします。なかなか良い出来でした。お父様も上諏訪で個展をされたとの由、先の諏訪の小池様よりお聞きしましたが、拝見することができず残念でした。5月中旬にある展覧会へ出品しようと思つて作品を作っています。

先日謙郎兄様より今学期月謝30円也をお借りする故小生の五月分お送り下さい。

1937年（昭和12年）10月4日

やっと作品も完成し明日搬入するところです。発表まで心配です。ぜひ入選してくれるとうれしいですが、相当多数ある様子ですから。帝展制作で思はぬお金がいました故、今月分ご都合できましたら至急お送りおねがいします。発表は10日すぎの様です。

1944（昭和19）年3月3日 節郎から太一宛書簡

時局はますます重大、小生も覚悟よろしく仕事にはげんでおります。

先日戦艦献納展を見に行つて久方ぶりに芸術らしき絵を見てうれしかった。結城先生5点出品なかなかよかった。2点山水、3点花鳥でしたが、山水が大変良かった。絵ハガキが売り切れで残念でした。ひょっとしたら妹を送りながら帰るかもしれません。

1944（昭和19）年 節郎から太一宛書簡

先日の三越の美統展の出品作外務省の買い上げとなりました。しかしそれもキフのようなものですが国家のため故ゆずりました。

1945年（昭和20）年2月19日の書簡 節郎から太一宛書簡

風邪をひいて工場を3日程休んでいます。今日はだいぶ良く2、3日中にはまた工場へ出勤できそうです。田所先生と狐島へゆかれたとの由先生からうけたまわりました。大変によろこんでおられました。

東京は食物も何かと不自由ですが決戦の事ゆえ不平がましきことは申すまじき覚悟です。

東京は時々空襲がありますが、今のところさしたることはありません。近々中には一度衣類を持って帰国するつもりですが、まだはっきりわかりません。

ウリのかす漬一樽ありがとうございました。空樽を送り返せとのことですが、みんな防空樽に使用して大変に傷んでしまいました。良いものをお送りします。工場事務係 高橋節郎

1946（昭和21）年1月の節郎から梅見宛ハガキ

帰国の所存ですがまだ日はわかりません。兄上の話で水絵絵具 カン寺さんにやってしまったとの由、残念に思っています。必ず残りは残しておいてくださいませ。東京にはなくて閉口しています。

戦後の書簡 太一から節郎宛書簡

手紙ありがとうございます。五月に帰省する様に認めてありましたが、毎日待つておりますが一向に来ませんでした。どうした事ですか、そんなに忙しいですか。今何を制作していますか。聞かせて下さい。結城先生はまた上京しておられますが、沢あんと菜漬を差し上げようと思つていましたが、昨今の暖気ですっぱくなってしまいました。

1946（昭和21）年10月6日 節郎から梅見宛ハガキ

日展どうやら入選しました故ご安心くださいませ。

戦後 節郎から梅見・太一宛ハガキ

会社に毎日出ています故、なかなか自由にならず閉口していますが、ひまを見て帰るかもしれません。

本年は日展は不出品にしようかと考へています。なかなか今の暮らしでは作品もできません。草月流の家元と先日お会いして作品が集まれば日展をやめて、草月流とタイアップして個展を開きたいと考えています。父上のお考えはどうでしょう。相当に売れるつもりですが。

1955（昭和30）年6月30日 節郎から梅見宛書簡

日米水泳競技の「総理大臣賞」を制作することになり、その制作の段取りをしてからでないといふ帰省できません。

東京美術学校時代

高橋節郎も、自分の学生時代は手板の手本のほか自由課題があって変塗の花台や小箱を制作したが、素地は下谷あたりの素地屋やろくろ屋に依頼したという。「技術的なことは磯矢先生がつきっきりで教えてくれた。大変熱心にわからないことがあれば何でも教えてくれた。学校の手板はそのまま写して作りました。漆を焼いたり、弁柄を混ぜたり、置き目をとったり、磯矢先生が全部教えてくれました。手取り足取りとは、そういうことを言うのかもしれませんが。他の先生は時々部屋を覗いて言葉をかけてくれたりしたが、採点にはいらしていた。手板の採点は技術主体でしょうね。その当時は厳しかった。先生が学生に厳しかったのではなく、点数が厳しかった。講評会はなかったが先生が「お前、今回は悪かった」と直接言ってくれた。」

「東京芸術大学創立 125 周年記念事業 漆芸 軌跡と未来」展図録 2012

現代工芸美術家協会 主張

現代の工芸という言葉は自ら過去の工芸という言葉と対照される。過去の工芸とは既に遠のいた歴史的反省の存在価値しかないものを指す。之に反撥を加えると同時に、現代を呼吸し消化し生きた生命を感じつつ制作した作家の所産を現代工芸と名づく。

由来「工芸」というものは用と美の抱き合ったものだという概念が色々の解釈を投げかける。機能を主としつつ美的な処理を行うインダストリアル・デザイン、合理性と経済性思想から生活過程に随伴することを本義として自ら量産を予期する生活工芸、或いはこれと同巧異曲で製造手段を手製におくべきことを主張するクラフト等々。

然し工芸の本義は作家の美的イリュージョンを基幹として所謂工芸素材を駆使し、その造型効果による独特の美の表現をなすもので、その制作形式の立体的たると平面的たるとをとわず工芸美を追求することにある。「使える工芸」という文字は、長い間の道具的説明でしかなかったのである。

現代の工芸は又現代の新しい解釈を要求する。日本工芸美術展はこのような工芸観をもつ作家の集団の展観であって、今後我々の展開する制作活動は高い視野に立っての日本工芸の道標であるべく又広い意味に於いては日本の特性を持つ国際交流への選抜手でなければならない。

現代工芸美術家協会「第1回日本現代工芸美術展」1961

高橋節郎「穂高の四季」

目を瞑りみれば
 瞼に浮かぶ故郷の四季
 穂高の春は好き
 夏も好き
 秋もまた好き
 冬はさらに好き
 穂高の四季は
 美しき緑
 澄んだ空気
 清らかな水
 そして崇高な岳岳よ
 穂高の自然は
 すべて無始無終なり
 穂高に生を受けしことを
 喜び感謝
 故郷は永久に美しく
 いつの日も故郷を想い

故郷を愛で
 そしていつの日か
 人はそれぞれに
 故郷に回帰するであろう

高橋節郎の技法

鎗金（そうきん）

- ・ 日本でいう「沈金（ちんきん）」の中国での呼び名が鎗金であるが、高橋節郎は、沈金技法をもとにしながら、いろいろ工夫を施し、線の細い表現により、金の濃淡や陰影の効果などを可能とした。伝統的な沈金とはやや異なっているため、高橋節郎はあえて自分の技法を「鎗金」と呼び、区別している。
- ・ 漆を塗り重ねた面に刀で文様を彫り、その溝に漆を接着剤としてすり込んで、金箔や金粉を埋める。漆が乾いたら、はみ出た余分な金を拭き取り、刻線内の金だけを残すようにする。すると、刀で彫った線が金で表わされることになる。

螺鈿（らでん）

夜光貝、蝶貝、あわび貝などの貝類、牙角類、べっこう、水晶、琥珀、その他宝石のようなものを、漆を塗り重ねた面に貼ったり、はめ込んだりして装飾することを、螺鈿という。

貝などを切ったり薬品で腐食したりして、文様の形にする。これを漆の面上に配し、装飾するには、いくつかの技法の違いがある。文様の形の貝を面の上に貼り、その上からまた漆を塗り重ね、表面を平たんにしてから貝のある部分だけを砥ぎ出す方法。これは、地の面と貝の面が同じ高さになる。（研出螺鈿、薄貝螺鈿）一方、漆塗の面をあらかじめ貝の文様の形に合わせて掘り込んでおき、その中に貝を入れて接着する方法は、厚みのある貝が地の面より高く出て、立体感のある仕上がりになる。（肉彫り螺鈿、厚貝象嵌）

蒔絵（まきえ）

蒔絵のイメージ写真漆塗の面の上に漆で文様を描き、上から金粉や銀粉、色粉などを蒔いて、それらの粉を定着させて文様を表わす方法。奈良時代から、日本において最も発達を遂げた技法であり、さまざまな手法が生まれた。

金粉などを蒔きつけた上から、漆を何度も塗り重ね、その後、金の文様が現れてくるまで漆の面を平らに研ぎだす「研出蒔絵（とぎだしまきえ）」、金粉が定着した上から金の文様が透ける程度に薄く漆を塗り、表面を磨いて仕上げる「平蒔絵（ひらまきえ）」、漆で文様を描く際に、漆や灰の粉などで文様の部分を高く盛り上げ、その上に金粉を蒔き、平蒔絵と同様に仕上げる「高蒔絵」、高蒔絵と研出蒔絵の併用であり、高蒔絵の上から漆を塗り重ね、平らな面と盛り上げた面を高低に沿って同一面上に研ぎ出す「肉合（研出）蒔絵（ししあいとぎだしまきえ）」などがある。

乾漆（かんしつ）

乾漆のイメージ写真木や粘土石膏などの型の上から、漆（木の粉や焼土を混ぜる場合もある）と麻布を貼り重ね形を整えて、漆塗で仕上げて像を作る手法。技法そのものは正倉院宝物の中にも見られるが、奈良時代から仏像の制作に取り入れられ発達した。

型の上から漆で麻布を貼り、その型を抜いてしまい、漆塗で仕上げる方法を「脱乾漆（だつかんしつ）」といい、軽い造形作品ができる。一方、木の型を抜かずに仕上げる方法を「木芯乾漆（もくしんかんしつ）」といい、高橋節郎はこの方法を用いて、立体的な抽象造形作品を制作している。